

【今日の説教から】

クリスマスのお祝いを済ませ、一年の締めくくりの週を迎えるました。2024年、今年は皆さまにとってどのような年だったでしょうか。

アドベントから始まり、神様からの様々な信仰のテストを受けるような出来事を見てまいりました。私も妻ももう年を取っていると連発していたザカリヤに、神様は何事も可能であることを示されました。

どうしたらそんなことが分かるだろうか、理解不能だという事が人生にあったとしても、私たちの理解自体が何物でもないという事、神様は人知をはるかに超えたお方であるという事を知らされるのです。

マリヤにしても、愛する人との破綻や、身の危険をも顧みず、神様の言葉に身を預けていく姿、自分のことばかりではなく國を憂える姿とその祈りは感動的でした。

贖い主、救い主であるメシヤ、イエス様がお生まれになられるというのに、「客間には彼らのいる余地がなかった」。これは人の心の暗闇を現しています。

しかし今日の箇所には赤ちゃんの姿でありながら主が遣わされた救い主であると気付いた二人の人たちが登場します。シメオンは赤ちゃんイエス様に出会い、「わたしの目が今あなたの救を見た」と言い、「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりにこの僕を安らかに去らせてください」と語り、アンナも84歳でしたが、その靈の目ははっきりと見開いていました。年を重ねてもますます心の目鋭く主の救いをほめたたえましょう。

皆様おはようございます。

先週は主のご降誕をお祝いしました。そして今日は一年の締めくくりの礼拝です。

アドベントから始まり、神様からの様々な信仰のテストを受けるような出来事を見てまいりました。私も妻ももう年を取っていると連発していたザカリヤに、神様は何事も可能であることを示されました。

どうしたらそんなことが分かるだろうか、理解不能だという事が人生にあったとしても、私たちの理解自体が何物でもないという事、神様は人知をはるかに超えたお方であるという事を知らされるのです。

マリヤにしても、愛する人との破綻や、身の危険をも顧みず、神様の言葉に身を預けていく姿、自分のことばかりではなく國を憂える姿とその祈りは感動的でした。

贖い主、救い主であるメシヤ、イエス様がお生まれになられるというのに、「客間には彼らのいる余地がなかった」。これは人の心の暗闇を現しています。

しかし今日の箇所には赤ちゃんの姿でありながら主が遣わされた救い主であると気付いた二人の人たちが登場します。その様子を読み進めてまいりましょう。

2:21 八日が過ぎ、割礼をほどこす時となったので、受胎のまえに御使が告げたとおり、幼な子をイエスと名づけた。

2:22 それから、モーセの律法による彼らのきよめの期間が過ぎたとき、両親は幼な子を連れてエルサレムへ上った。

2:23 それは主の律法に「母の胎を初めて開く男の子はみな、主に聖別された者と、となえられねばならない」と書いてあるとおり、幼な子を主にささげるためであり、

2:24 また同じ主の律法に、「山ばと一つがい、または、家ばとのひな二羽」と定めてあるのに従って、犠牲をささげるためであった。

その前に、割礼と共に初めて生まれた男子をささげるいけにえと、子を産んだ母のきよめのためのいけにえを捧げる時が来ました。

初子の男の子。ぱっと、出エジプトの出来事が思い出されることだと思います。

神様は、ご自分の民をエジプトから救い出される際、人間であろうと、家畜であろうと、初子の男の子(雄の家畜)の命を奪われました。そして出エジプト記13章にはこうあります。

13:1 主はモーセに言われた、

13:2 「イスラエルの人々のうちで、すべてのういご、すなわちすべて初めに胎を開いたものを、人であれ、獣であれ、みな、わたしのために聖別しなければならない。それはわたしのものである」。

13:3 モーセは民に言った、「あなたがたは、エジプトから、奴隸の家から出るこの日を覚えなさい。主が強い手をもって、あなたがたをここから導き出されるからである。種を入れたパンを食べてはならない。

民数記 18:15 すべて肉なる者のういごであって、主にささげられる者はみな、人でも獣でも、あなたに帰する。ただし、人のういごは必ずあがなわなければならない。また汚れた獣のういごも、あがなわなければならない。

18:16 人のういごは生後一か月で、あがなわなければならない。そのあがない金はあなたの値積りにより、聖所のシケルにしたがって、銀五シケルでなければならない。一シケルは二十ゲラである。

(民数記で規定されているのは「銀5シェケル」ですが、新約時代には献げ物の内容が変わっていたようで、支払う額は20日分の日當にあたるとも言われていますが、聖書にはその具体的な内容は記していません。いずれにしても、父親はなんらかの「贖いの代価」を祭司に支払って息子を買い戻したのです。「牧師の書斎」サイトより引用)

それと共に母親のきよめのためにはレビ記12章にこうあります。

12:1 主はまたモーセに言われた、

12:2 「イスラエルの人々に言いなさい、『女がもし身ごもって男の子を産めば、七日のあいだ汚れる。すなわち、月のさわりの日かずほど汚れるであろう。

12:3 八日目にはその子の前の皮に割礼を施さなければならぬ。

12:4 その女はなお、血の清めに三十三日を経なければならぬ。その清めの日の満ちるまでは、聖なる物に触れてはならない。また聖なる所にはいってはならない。

12:5 もし女の子を産めば、二週間、月のさわりと同じように汚れる。その女はなお、血の清めに六十六日を経なければならぬ。

12:6 男の子または女の子についての清めの日が満ちるとき、女は燔祭のために一歳の小羊、罪祭のために家ばとのひな、あるいは山ばとを、会見の幕屋の入口の、祭司のもとに、携えてこなければならない。

12:7 祭司はこれを主の前にささげて、その女のために、あがないをしなければならない。こうして女はその出血の汚れが清まるであろう。これは男の子または女の子を産んだ女のおきてである。

12:8 もしその女が小羊に手の届かないときは、山ばと二羽か、家ばとのひな二羽かを取つて、一つを燔祭、一つを罪祭とし、祭司はその女のために、あがないをしなければならない。こうして女は清まるであろう』。

ヨセフとマリヤの家、イエス様の家ははこの子羊のいけにえに手が届かなかつた、貧しい家庭であったことが分かります。そして、この初子の男の子を贖ういけにえに関しては、その記述が見当たらぬのです。しかし、それはある意味正当であるのかもしれません。この赤ちゃん、イエス様は、ここで贖いのお金を神殿に払わなかつたとしても、その命をこのあと三十数年後に、世の贖いとして、世の罪を取り除く神の子羊として十字架に捧げることになるのですから。そんなことがふと感じられるこの箇所なのでした。

2:25 その時、エルサレムにシメオンという名の人がいた。この人は正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた。

2:26 そして主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けていた。

2:27 この人が御霊に感じて宮にはいった。すると律法に定めてあることを行うため、両親もその子イエスを連れてはいってきたので、

2:28 シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、

「正しい信仰深い人で、イスラエルの慰められるのを待ち望んでいた。また聖霊が彼に宿っていた」シメオン。このような正しい人、神様の標準、ご意志、ご性質に従い、順応し、合致適合し、同一化させようと願い続けている人、神様との正しい関係の中にずっと過ごし続けている人が地上にいたという事は何という幸いでしょうか。

「客間には彼らのいる余地がなかつた」「ヨハネ 1:10 彼は世にいた。そして、世は彼によ

ってできたのであるが、世は彼を知らずにいた。11 彼は自分のところにきたのに、自分の民は彼を受けいれなかつた。」

こういう世の薄情さの中にあって、シメオンとアンナという人の存在は、イエス様を心から喜びお迎えし、神様をあがめる礼拝者たちは、どれだけ神様に喜ばれる存在であったのでしょうか。

ヨハネ 20:28 トマスはイエスに答えて言った、「わが主よ、わが神よ」。

20:29 イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信する者は、さいわいである」。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのこと書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

ヨハネ 4:32 ところが、イエスは言われた、「わたしには、あなたがたの知らない食物がある」。

4:33 そこで、弟子たちが互に言った、「だれかが、何か食べるものを持ってきてさしあげたのであろうか」。

4:34 イエスは彼らに言われた、「わたしの食物というのは、わたしをつかわされたかたのみこころを行い、そのみわざをなし遂げることである。

6:26 イエスは答えて言われた、「よくよくあなたがたに言っておく。あなたがたがわたしを尋ねてきているのは、しるしを見たためではなく、パンを食べて満腹したからである。

6:27 枯れる食物のためではなく、永遠の命に至る枯れない食物のために働くがよい。これは人の子があなたがたに与えるものである。父なる神は、人の子にそれをゆだねられたのである」。

6:28 そこで、彼らはイエスに言った、「神のわざを行うために、わたしたちは何をしたらよいでしょうか」。

6:29 イエスは彼らに答えて言われた、「神がつかわされた者を信じることが、神のわざである」。

6:30 彼らはイエスに言った、「わたしたちが見てあなたを信じるために、どんなしるしを行って下さいますか。どんなことをして下さいますか。

6:31 わたしたちの先祖は荒野でマナを食べました。それは『天よりのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです」。

6:32 そこでイエスは彼らに言われた、「よくよく言っておく。天からのパンをあなたがたに与えたのは、モーセではない。天からのまことのパンをあなたがたに与えるのは、わたし

の父なのである。

6:33 神のパンは、天から下ってきて、この世に命を与えるものである」。

6:34 彼らはイエスに言った、「主よ、そのパンをいつもわたしたちに下さい」。

6:35 イエスは彼らに言われた、「わたしが命のパンである。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者は決してかわくことがない。

ザカリヤは私も妻ももう年を取っていると言いましたが、シメオンとアンナはもう年を取っているとは言いませんでした。彼は「主のつかわす救主に会うまでは死ぬことはないと、聖霊の示しを受けて」おり、それを信じ続けていました。老齢を重ねてもなお、あきらめず、疑わず、神殿にいて、その救い主に出会う日まで、待ち望み続けていました。信じて待つ。そして目を凝らす。この目は必ず主の救いを見る。これが私たちの信仰の姿勢でもあります。

私たちの目に見えるものは困難、不安、絶望、心配の数々であるかもしれません。しかしそのような弱々しい私たちであっても、その私たちの目が、ついに主の救いを見る時が来る。私たちが生きているうちにその絶大な主の救いを必ずこの目で見る。負け続けではない。絶望ばかりではない。そんな中で、私たちのこの目が主の救いを必ず見る。これが私たちへの主のお約束なのではないでしょうか。

この教会もまた主の救いを見る。そしてここにお生まれになられたイエス様がそれを成してくださるとの信仰を私たちは持っているのです。

2:28 シメオンは幼な子を腕に抱き、神をほめたたえて言った、

2:29 「主よ、今こそ、あなたはみ言葉のとおりに／この僕を安らかに去らせてくださいま

す、

2:30 わたしの目が今あなたの救を見たのですから。

2:31 この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、

2:32 異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」。

この救いは万民のための救い。御民イスラエルのみならず、異邦人をも照らす啓示の光です。この救いに漏れる者はだれ一人ありません。この光を私たちは頂き、この光を私たちは掲げているのです。

2:33 父と母とは幼な子についてこのように語られたことを、不思議に思った。

2:34 するとシメオンは彼らを祝し、そして母マリヤに言った、「ごらんなさい、この幼な子は、イスラエルの多くの人を倒れさせたり立ちあがらせたりするために、また反対を受けるしとして、定められています。――

2:35 そして、あなた自身もつるぎで胸を刺し貫かれるでしょう。——それは多くの人の心にある思いが、現れるようになるためです」。

とはいっても、救いにあずかるという事の上にもたやすく出来事がありました。イエス様は迫害のしでもありました。多くの人はこの方につまずき、受け入れることが出来ません。自らのありのままの姿を見て、自分に問題があり、自分には病があるから医者が必要だと、子供のようにへりくだって、素直に受け入れることが出来る人ばかりではなかったからです。取り除かれ、迫害を受け、刺し貫かれ、十字架につけられる…。これを見ることは母マリヤにとっても胸の刺し貫かれるような苦痛となることでしょう。しかしそれが神様の御心でした。

2:36 また、アセル族のパヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。彼女は非常に年をとっていた。むすめ時代にとついで、七年間だけ夫と共に住み、

2:37 その後やもめぐらしをし、八十四歳になっていた。そして宮を離れずに夜も昼も断食と祈とをもって神に仕えていた。

2:38 この老女も、ちょうどそのとき近寄ってきて、神に感謝をささげ、そしてこの幼な子のことを、エルサレムの救を待ち望んでいるすべての人々に語りきかせた。

ここにも神様からの慰めを望み、年を重ねてもなおその目は鋭く、神様からの御自分の救いは来ると確信して宮から離れなかった一人の人が登場します。

詩篇ダビデの歌

27:1 主はわたしの光、わたしの救だ、わたしはだれを恐れよう。主はわたしの命のとりでだ。わたしはだれをおじ恐れよう。

27:2 わたしのあだ、わたしの敵である悪を行う者どもが、襲ってきて、わたしをそしり、わたしを攻めるとき、彼らはつまずき倒れるであろう。

27:3 たとい軍勢が陣営を張って、わたしを攻めても、わたしの心は恐れない。たといいくさが起って、わたしを攻めても、なおわたしはみずから頼むところがある。

27:4 わたしは一つの事を主に願った、わたしはそれを求める。わたしの生きるかぎり、主の家に住んで、主のうるわしきを見、その宮で尋ねきわめることを。

27:5 それは主が悩みの日に、その仮屋のうちにわたしを潜ませ、その幕屋の奥にわたしを隠し、岩の上にわたしを高く置かれるからである。

27:6 今わたしのこうべはわたしをめぐる敵の上に高くあげられる。それゆえ、わたしは主の幕屋で／喜びの声をあげて、いけにえをささげ、歌って、主をほめたたえるであろう。

27:7 主よ、わたしが声をあげて呼ばわるとき、聞いて、わたしをあわれみ、わたしに答えてください。

27:8 あなたは仰せられました、「わが顔をたずね求めよ」と。あなたにむかって、わたしの心は言います、「主よ、わたしはみ顔をたずね求めます」と。

ここに私たちの喜びがあります。私たちの安息と力づけがあります。私たちもまた、宮に集い、礼拝の場に集い、主に出会い、力づけを得て、励ましを得て、このお方をじっと見て、このお方を伝える生き方に、年を重ねてもなおおお靈の目に聴く、邁進したいのです。

◇祈祷；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。「宿屋には彼らの泊まる場所がなかった」と、人のつれなさと薄情さが際立った主のご降誕の日でしたが、喜びにあふれた羊飼いたちの礼拝や、シメオンやアンナのような敬虔なる人たちの存在を見て、心が安らぎます。年を重ねても靈の目は鋭く、聖靈様のお導きにより、見るべきところを見つめ、主を見つめ主を礼拝し、主の模範に従うことが出来るようにとお導きください。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。私たちをお用い下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン